

羽咋市・本成寺蔵の「洛中洛外図小屏風」について

北 春千代

はじめに

平成二十九年（二〇一七）六月十一日から七月九日にかけて、石川県立歴史博物館企画展示室で企画展「描かれた都―石川に伝わる洛中洛外図屏風たち―」を開催した。

同展は、内灘町・光明寺蔵の「東山遊楽図小屏風」をはじめ、羽咋市・本成寺蔵の「洛中洛外図小屏風」や金沢市立安江金箔工芸館蔵で伝岩佐勝重筆の「洛中洛外図屏風」、金沢市立中村記念美術館蔵で加藤遠沢筆の「祇園祭礼図屏風」、個人蔵の「京都名所図屏風」などの屏風類五点に加え、本館蔵の「都名所図会」の冊子本を参考に展示した。

同展は特別展ではなく、企画展ということで予算が抑えられ、印刷

費の伴わない展覧会であったため、図録や目録等は発行できなかった。そのため、会期中はもとより、展覧会が終わってからも印刷物の有無の問い合わせがしきりとあり、少しでも、その自責の念を埋めるために本稿を草した次第である。

さて、本展を企画するにあたり、迷ったのがその内容である。まず、テーマを決めれば、それに沿って資料を選定すればよいのであるが、石川県内所在で京都を描いた洛中洛外図屏風以外でも、奈良名所図屏風や吉野山図屏風、厳島名所図屏風、近江八景図屏風、増上寺有章院靈廟二天門・日光東照宮陽明門図屏風などと名所絵の範疇に入る魅力ある屏風類も多々あり、それらをどうしようかと思ったが、結果的に展示スペースとの関係から、「描かれた都」というテーマに絞り、京都に限定し、東山遊楽図小屏風や祇園祭礼図屏風、京都名所図屏風をも

加え構成した次第である。

出品資料の概要

最初に展示した内灘町・光明寺蔵の「東山遊楽図小屏風」六曲一隻は、室町時代から桃山時代十六世紀の作になり、紙本著色で描かれ、右方を中心に清水寺(1)の境内を大きく配し、左方には祇園社(八坂神社)(2)を覗かせる。一扇目には清水寺の釈迦堂や阿弥陀堂・奥院下方に音羽の滝を、二扇目に前方が懸崖となった舞台造の本堂、三扇目に地主神社、轟門、三重塔、田村堂、四扇目に朝倉堂などを配する。四・五扇目中央の金箔と金砂子の霞形により五・六扇目は場面が変わり、祇園社(八坂神社)の境内が描かれる。

全体として、様々な階層の人々があちこちに集い、的当てや酒宴などの行楽を楽しみ、また喧嘩の場面も描かれている。年代もそれなりに遡る新出本の初公開の資料であり、注目された一作である。

次に登場したのが羽咋市・本成寺蔵の「洛中洛外図小屏風」であるが、別項で紹介する。

金沢市立安江金箔工芸館蔵の伝岩佐勝重筆の「洛中洛外図屏風」六曲一双は、江戸時代十七世紀の作で、紙本金地著色に描かれ、右隻に清水寺や祇園社(八坂神社)、蓮華王院(三十三間堂)(3)、方広寺大仏殿(4)、建仁寺(5)などの神社、それに町屋を配し、下方には鴨川(6)が流れ、五条橋(7)や四条橋(8)が架かり、洛東・洛中の景を表す。

一方、左隻は、右遠景に鹿苑寺(金閣寺)(9)、左遠景に大堰川(10)と松尾大社(11)を、中景中央に二条城(12)のスペースを大きく取り、天守を遠景に小さく配し、長々と続く後水尾天皇(13)の行幸の場面を描き、下方に町屋と堀川(14)を配するなど、洛北・洛西・洛中の景を明快な表現で表す。岩佐勝重は、岩佐又兵衛(15)の嫡男で延宝元年(一六七三)没という。本屏風は、『金沢市立安江金箔工芸館所蔵品図録』(平成九年三月三十一日、金沢市文化財保存財団発行)に原色図版で紹介されている。

金沢市立中村記念美術館蔵の加藤遠沢筆の「祇園祭礼図屏風」六曲一双は、江戸時代十八世紀の作で、紙本金地著色により、祇園祭(16)の賑わいを余すところなく表している。山鉾巡行を中心に御輿遷幸をも描き、公家衆から武士・町人・僧侶・尼僧など、あらゆる階層と年齢の人々をおよそ一千人近くも描き込み、表情豊かに生き生きと表す。筆者の加藤遠沢は、狩野探幽(17)の門下・四天王の一人で、会津藩のお抱え絵師となり、享保十五年(一七三〇)に没している。なお、この屏風は、箱書によれば、加賀藩七代藩主前田宗辰(18)に延享元年(一七四四)輿入した会津侯の息女・常姫(19)の持参品という。本屏風は、『金沢市立中村記念美術館所蔵品図録Ⅰ』(平成九年三月三十一日、金沢市文化財保存財団発行)に原色図版で紹介されている。

個人蔵の「京都名所図屏風」六曲一双は、江戸時代十九世紀の作で、紙本著色に描かれる。右・左両隻に清水寺をはじめとする京都の社寺や町並・橋などの名所地をクローズアップして散りばめ、金銀の雲形

により方向性や連続性・距離感を遮断している。

羽咋市・本成寺蔵の「洛中洛外図小屏風」について

さて、「描かれた都―石川に伝わる洛中洛外図屏風たち―」に展示した残りもう一点が羽咋市柴垣町八―二三に所在する本成寺の蔵にある「洛中洛外図小屏風」六曲一双である(図1右隻全体、図2右隻1〜3扇、図3右隻4〜6扇、図4左隻全体、図5左隻1〜3扇、図6左隻4〜6扇)。

同寺は日蓮宗に属し、山号を「長興山」といい、室町時代の応永二十五年(一四一八)に滝谷・妙成寺の五世・日立上人が開創した寺院である⁽²⁰⁾。同寺墓地に「正長貳年己酉八月十四日」刻銘の石造笠塔婆があり、日立上人の笠塔婆とみられている⁽²¹⁾。

このような同寺蔵の洛中洛外図小屏風をはじめて実見したが、平成二十二年(二〇一〇)八月二十六日のことであった。それは個人的な別件の調査⁽²²⁾に係り、同寺を訪れた際、本命の調査が終わり、帰り際にたまたま本屏風を拝見する機会に恵まれたのである。あいにく次の寺の調査の刻限が控えており、それゆえ、時間がなく簡単な写真を撮るのに精一杯であった。後ろ髪をひかれる思いで寺を出る直前、さらに目にしたのが本屏風を紹介した新聞記事二種であった。その一枚は、テレビの「開運なんでも鑑定団」の番組に出品したときのもので、それ以前にテレビで全国放送された履歴を持つことがわかった。

もう一枚の新聞記事⁽²³⁾は、「加越能逸品珍品 お宝探し45」の連載記事で見出しが「金碧に浮ぶ京の風情」と付けられていた。その記事の一部を引用すると「昭和三十二年当時、この洛中洛外図屏風の存在は知られていなかった。三年後の三十五年、土蔵の二階で見つかった屏風は、ほこりまみれで破損状態が激しかったため、座敷に飾られることなく縁の下にほうり込まれた。それが偶然、目の利く金沢市内の表具店主が、これは掘り出し物と屏風を見つけ表装したのである。」「この屏風がどのような経緯で本成寺に伝わったのか、作者も不明である。」と紹介されていた。

この本成寺蔵の「洛中洛外図小屏風」六曲一双は、桃山時代十六世紀の作とみなされるが、紙本金地著色で描かれ、各画面縦八〇・五センチ、横二八九・〇センチの法量を測る。

内容の概略は、展覧会での公開の折、キャプションに簡単に記したが、いくつかの思い違いや勘違いもあり、ここに訂正して記してみよう。

表現と構図

まず、両隻を通じていえることは、わりと高い位置から俯瞰して表現されていることである。

そして複雑な形で横や斜めにたなびき広がる金雲により、画面の距離感が遮断され、その雲間から清水寺を始めとする数々の寺社や町屋、鴨川などの河川の景観が現れるが、人物はそれほど多くはなく、比較的主ばらであり、少し小さめに描かれている。金雲は、輪郭の縁が三



図1 右隻全体



図2 右隻1-3扇 三十三間堂・清水寺・方広寺大仏殿・清水寺西門・五条橋



図3 右隻4-6扇 祇園社(八坂神社)・四条橋・四条通・河原町・山鉾巡行



図4 左隻全体

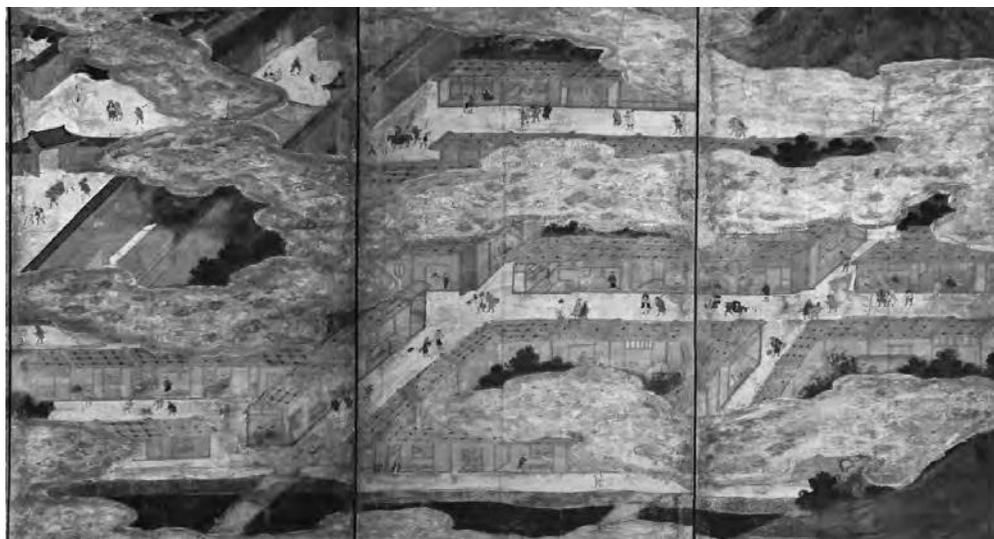


図5 左隻1-3扇



図6 左隻4-6扇

列の珠点を施し、金雲内部に不定形な雲形を置き、それらを胡粉箔押しで盛り上げた加飾法をとる。

また、町筋(道路)を金箔地とするが、そこに描き込まれた人物は金箔地の上に直接描いており、所々剥落した箇所からは金箔地が覗いている。そして寺社や町屋などの建物、河川などは金箔を貼らずに紙本の上に着色している。

両隻とも町筋は南北を水平、東西を右上から左下へと斜めに引かれる「順勝手」⁽²⁴⁾という構図により表されるが、代表的なものとして有名な「上杉家本」(国宝)⁽²⁵⁾や「歴博乙本」(旧高橋家本)(重要文化財)⁽²⁶⁾なども「順勝手」により描かれているものである。

景観の概要

数箇所場面を表わす貼紙の痕跡があるが、剥落しており、文字として読み取れず惜しまれる。

まず、右隻から見てゆくと、右一扇目の中段少し下に瓦葺きの蓮華王院(三十三間堂)⁽³⁾(図7上)を横位置に細長く配し、その下の金雲を挟んで下段に教王護国寺(東寺)⁽²⁷⁾の五重塔(図7右下)を描く。

蓮華王院(図7上)は、三十三間堂の名で親しまれ、軒下で行われた「通し矢」の行事がよく知られる。本図は、通し矢は行われていないが、軒下の縁側で二人の男が酒を酌み交わす様子と、それに給仕する一人の従者を配している。下段に配された教王護国寺⁽²⁷⁾は、東寺の名で知られ、五重塔(図7右下)が象徴的である。蓮華王院とは距離的に離れているが、本図では金雲を隔てて距離感を無視し直ぐ近く

に描いている。

一扇目から二扇目上段部にかけて檜皮葺き屋根で堂の前面両側に翼廊を付けた清水寺とその舞台⁽¹⁾(図8左上)(図9)や南方に音羽の滝(図8右下)を配し、その下二扇目中段ほどから下段にかけて、方広寺大仏殿⁽⁴⁾(図10)とそれを囲む塀、並びに二階建ての門を描く。よく見てみると、清水寺の崖に懸けられた張り出す舞台には、参詣や風光を愛でるため訪れた男女を配し(図8左上)(図9)、舞台右方に急角度の石階段(図8中)を描く。その階段の上の方では傘を担ぎ下へ降りる男(図8中上)、下方では音羽の滝に打たれいそいで階段を駆け上がる二人の白装束姿の男(図8中下)、階段下付近に枴^{おわし}(天秤棒)に曲物を下げ担ぐ男(図8右下)、また、頭の上に荷を載せた前掛姿の女性と、その手を引く童子(図8右下)、さらに下方には音羽の滝に打たれる白装束の男を描く(図8右下)。本堂の屋根は、本来寄棟造のところ、本図では入母屋造とし、実際とは違いがある。崖には桜が咲き、季節は春であることがわかる。

方広寺大仏殿⁽⁴⁾(図10)に目を向けてみると、入母屋造で瓦葺き屋根の二層の建物に描かれ、正面の中央に入入り口の開口部を設ける。大仏殿は、天正十四年(一五八六)、豊臣秀吉が六丈の大仏を造像し安置したが、慶長元年(一五九六)の大地震により破壊した。そのため秀吉は信州善光寺本尊を請じ安置したこともあったが故あって同寺へ戻した。後に豊臣秀頼は亡父追善供養のため、同七年(一六〇二)、再建に着手したが年末に失火で頓挫してしまった。その後、豊臣秀頼

はさらに再建に着手し、同十七年（一六一二）に完成した。慶長十七年の秀頼再建の大仏殿は下層の屋根正面中ほどに唐破風の屋根を付けるが、本図にはない。京都市・細見美術館所蔵の「東山名所図屏風」に描かれる大仏殿は、慶長元年の倒壊する前の形が描かれたとされるが、それには下層部の正面中ほどの屋根には唐破風はなく、その部分が開けられた切上となっている。本図には唐破風の屋根がなく、通しの形であるが、斜めを向く建物の形姿は、同美術館所蔵で江戸時代十七世紀の「奈良名所図屏風」に見える東大寺大仏殿の形に近く、同図の元となった図様を意識したのか検討を要する。

五扇目上段部辺りから三扇目下段にかけて画面を斜めに鴨川⁽⁶⁾が流れ、洛外と洛中を分けるが、その三扇目下と四扇目下段に五条橋⁽⁷⁾（図11）が架かる。また、三扇目中央部の雲間に奥から二扇目の清水寺の続きになる轟門（中門）や轟橋・朝倉堂・田村堂・三重塔・西門などが覗く。清水寺は、江戸時代の寛永六年（一六二九）、伽藍の多くを焼失し、それまでも何回となく焼亡を繰り返してきた。現在の本堂（国宝）は同十年（一六三三）徳川家光の寄進になる。同六年の火災以前の様子を描いたと思われる。

三扇目下と四扇目下段の五条橋（図11）付近を見てみると、橋の西詰両脇に右が西向き、左が南向きの板葺きの小屋を配し、南向きの小屋にはたぶさ髪の小袖に肩衣袴姿の座る男を描く。橋の上には（図11-2）、編笠を被った人物二人に、長刀を背負う従者、橋の奥には橋板に小物を並べ売る三人の男を描く。

四扇目に目を向けてみると、中段ほどやや上の左に四条橋⁽⁸⁾が架かる。ただ、四条橋は、当時簡素な小さな橋に描かれるのが一般的であるが、本図では、三条橋を思わせる欄干のある大きな図様に描かれている。勘違いをしているのであろうか。橋を渡った四扇目上段部に祇園社（八坂神社）⁽²⁾（図12）の門前と境内が描かれる。祇園社前の四条橋奥には参詣を終わり帰路にむかう小袖に肩衣袴の二人の武士と、槍を背負う従者、橋を渡り参詣に向かう小袖姿に被った編笠に布を垂らす二人の婦人と、後方には杵（天秤棒）⁽⁹⁾に荷を付け担ぐ脚半をはいた男の従者が描かれる。瓦葺き屋根の二層の西楼門をくぐった祇園社の境内には、左方に檜皮葺き屋根の本殿が配される。四扇目下段には三扇目下の五条橋から伸びる五条通りが描かれるが、本来右斜めの筋になるべきところが水平となり、不自然な形となっている。その両側に板葺き石置き屋根の長屋（見世棚）が建ち並び（図13）、五条橋に向かう小袖を着て布を垂らした笠を被り馬に乗る婦人が二人と馬牽きが二人、その後小袖を着て布を垂らした笠を被り歩く三人の婦人を描く（図13）。

五扇目から六扇目にかけて、五扇目に四扇目の四条橋から伸びる斜めの通りは四条通りで、中央で横に交差するのは河原町通りである。祇園祭⁽¹⁶⁾の長刀鉾をはじめとする山鉾七基の巡行、それに芸人の一行などを描いている（図14・15・16・17）。山を曳く犬神人⁽²⁸⁾、鉾を担ぐ犬神人、槍を背負ったり、鎧兜の甲冑姿で歩く犬神人、また、通りの両側には板葺き石置き屋根の長屋（見世棚）が建ち並び、中か



図10 右隻2扇中 方広寺大仏殿



図7 右隻1扇下 上 蓮華王院(三十三間堂)、
右下 教王護国寺(東寺)の五重塔



図11 右隻3・4扇下 五条橋

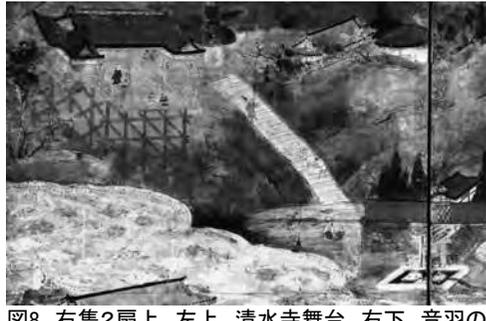


図8 右隻2扇上 左上 清水寺舞台、右下 音羽の
滝、中 石階段、中上 傘を担ぎ下へ降りる
男、中下 白装束の男、右下 杓(天秤棒)に曲
物を下げ担ぐ男、女性の手を引く童子、滝に打
たれる白装束の男



図11-2 右隻3扇下 五条橋西詰右



図9 右隻2扇上 清水寺の舞台



図16 右隻6扇上～中 四条通りの一つ北隣の通りを巡行する郭巨山と河原町通りを右折しようとする長刀鉾



図17 右隻6扇下 芸人の一行と板葺き石置き屋根の長屋の中から見物する男女



図18 左隻1扇中 旅人、通りで遊ぶ放髪で付紐の小袖姿の子供、牛の背や自身の頭に柴を載せ運ぶ女性、杓(天秤棒)に桶を下げ運ぶ男



図19 左隻1扇中 通りで遊ぶ放髪で付紐の小袖姿の子供



図12 右隻4扇上 祇園社(八坂神社)



図13 右隻4扇下 五条橋に向かう馬に乗る婦人と馬牽き、歩く婦人



図14 右隻5・6扇上～中 四条通りの一つ北隣の通りを巡行する郭巨山と河原町通りを右折しようとする長刀鉾、右下に油天神山が覗く



図15 右隻5扇中 河原町通りを鎧や兜姿で歩く犬神人、下に油天神山が覗く



図24 左隻2・3扇上 門前で馬に乗る武士、小袖に
胴服を着て立つ貴人



図20 左隻1扇中 牛の背や自身の頭に柴を載せ運
ぶ女性



図25 左隻4扇上 縁側で被衣を被り外を向く女性、
直垂袴姿で歩く貴人(公家)。禁裏か



図21 左隻1扇中 杓(天秤棒)に桶を下げ運ぶ男



図26 左隻5扇中 藁葺き小屋と牛を牽く男、杓(天
秤棒)に柴を付け運ぶ男



図22 左隻2扇中 板葺き石置き屋根の長屋(見世
棚)が建ち並び、通りに武士と長刀を背負う従
者たちほか



図23 左隻2扇中 武士と長刀を背負う従者

ら山鉾巡行を見物したり、休憩する人たちを描いている。
本来、六扇目辺に象徴としての禁裏⁽²⁹⁾が描かれるのが通例であるが、この隻には描かれていない。

左隻は、右一扇目の上下段に斜めに山肌を覗かせ、一扇目中段や二扇目上段、中段から下段、三扇目下段、四扇目下段などの通りの両側に板葺き石置き屋根の長屋（見世棚）を建ち並べ、通りを行き来する人に物を売る場面を幾つか描くが、物を売らないで何も置かず空いた箇所も多く見られる。また、通りでは旅人や遊ぶ放髪で付紐の小袖姿の子供、牛の背や自身の頭に柴を載せ運ぶ女性、杓（天秤棒）に桶を



図27 左隻6扇上 木々がうっそうと繁る山。鞍馬山か

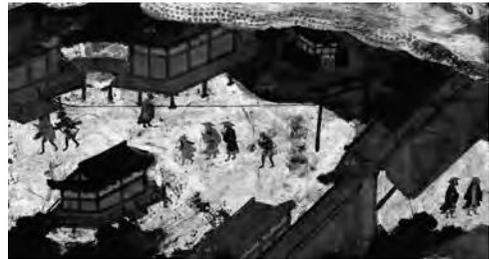


図28 左隻6扇中 参詣の旅人や巡礼者。今宮神社か



図29 左隻6扇中 参詣の旅人



図30 左隻6扇下 北野天満宮か

下げ運ぶ男、顔の鼻から下を布で覆う武士と長刀を背負う従者など（図18・19・20・21・22・23）を描く。

二扇目から四扇目の上段・中段にかけて、門のある瓦葺きの築地塀を複雑に配している。殊に二扇目・三扇目上段に瓦葺き屋根のある門、その左右を瓦葺きの築地塀とし、門前に弓や刀を背負った二人の従者を従え馬に乗る武士、門をくぐった中には座った従者を傍に従え、小袖に胴服を着て立つ貴人、その前に座って報告か挨拶をする男を描く（図24）。

四扇目上段に檜皮葺き屋根の入母屋造の建物三棟とほか数棟を配し、外の縁側に小袖を着て被衣^{かさぎ}を被り外を向く五人の女性、外の庭に冠を

被り直垂袴姿で歩く貴人（公家）を描く。禁裏の様子であろう（²⁵）（図25）。

また、五扇目中段に藁葺き小屋を配し、前に牛を牽く男、杓（天秤棒）に柴を付け運ぶ三人の男を描き、小屋の後方の小山や木々の間から瓦葺き重層の建物が描かれる（図26）。

六扇目は、洛北を通常とは違いより北に向かつて描き、上段に木々がうつそうと繁る山が描かれ、山頂に建物が見える。鞍馬山であろうか（³⁰）（図27）。中段には右に瓦葺き屋根のある門と築地塀、境内に瓦葺き屋根のある入母屋造の建物と板葺き屋根の建物、それに鳥居や参詣の旅人・巡礼者などを描く。今宮神社と思われ、疫病退治で知られる東山の祇園社に対し描かれたか（³¹）（図28、図29）。下段目は、檜皮葺き屋根の門に瓦葺き屋根の築地塀を右方から下方に配し、門の外に鳥居、内に檜皮葺きの建物や瓦葺き屋根の手水舎、ほか数棟を配し、石の燈籠も置かれている。ここでも小袖に胸服を着た身分の高そうな人物に頭を下げる男を描いている。北野天満宮であろうか。（³²）（図30）。そうであれば石の燈籠は「鬼の片腕」を切り落としたという平安時代半ばの武将である渡邊綱の寄進と称するものと推察される。なお、下部に堀川（³⁴）の流れを配している。左隻は具体的に場所の特定が難しく、従って深く言及しなかった。

まとめ

さて、洛中洛外図屏風は、中世に描かれたものを「第一定型」、近世になるものを「第二定型」と称している。「第一定型」は、右隻に禁裏

と下京、及びその周辺を、左隻に幕府と上京の西側とその周辺を描く。「第二定型」は、右隻に禁裏や下京、左隻には二条城や上京を描くのが一般的である。

羽咋市・本成寺蔵になるこの屏風は、左隻に禁裏を配し、二条城は描かれてはいない。従って第一定型や第二定型などの型にはまらない型破りの洛中洛外図小屏風として位置付けすることができる。

また、寺社などに代表される建物や町筋（道路）などの形について所々バランスが崩れ歪んで描かれた箇所があり、稚拙な感じを与え、一部について正確さに欠ける面がみられる。しかし、作者を考えてみると、人物表現などは古様を伝え、小さめで、まばらであるが、「歴博乙本」と比較的酷似している面をうかがうことができ、金雲の箇所も含め、一筆ではなく、数人で分担して制作したのではないかと考えられる。歴博乙本は、近年、狩野宗秀、あるいはその周辺の絵師が描いたのではないかといわれている。宗秀は、慶長六年（一六〇一）に没している。種々のことを総合すると、本成寺蔵のこの屏風は、宗秀周辺の絵師で、地理的な方角性においても余り京都に精通していない絵師の手になるのではないかと思われる。

（石川県立歴史博物館学芸主幹）

註

（1）清水寺は、京都市東山区清水にある古刹で、西国三十三所観音霊所の第十六番目の札所である。山号は音羽山。開山は延鎮といい、坂上田村麻

- 呂の助勢を得て寺観が整えられ、平安時代以降、観音の霊場として広く信仰を集めた。本堂の前方は懸崖となった舞台造で壯観である。伽藍は、平安時代の康平六年（一〇六三）の火災以来、江戸時代の寛永六年（一六二九）の焼失まで、記録の上で九回も焼亡を繰り返えし、現在の本堂（国宝）は寛永十年（一六三三）、徳川家光の寄進再建である。
- (2) 祇園社（八坂神社）は、京都市東山区祇園町の北側にある名社。素戔鳴尊ほかを祀り、古くから疫病退治の靈威により尊崇を集め、また、御霊会（祇園祭り）が盛況となって二十二社（下八社）の一つに数えられる。慶応四年（一八六八）、八坂神社と改称する。
- (3) 蓮華王院（三十三間堂）は、京都市東山区三十三間堂廻町にある天台宗の寺院で、妙法院が管理し、三十三間堂の名で知られる。長寛二年（一一六四）、後白河法皇が法住寺の一院として平清盛に命じ、新千体堂として創建する。その後、諸堂が建てられたが、建長元年（一二四九）に焼失したため、文永三年（一二六六）、再建された。現在の本堂（三十三間堂）はこのときのものである。慶長年間（一五九六〜一六一五）から、三十三間堂で矢を射る「通し矢」が行われ、また、一千一牀の観音像をはじめ、風神・雷神像など多くの寺宝がある。
- (4) 方広寺は、京都市東山区大和大路正面茶屋町にある天台宗の寺院である。天正十四年（一五八六）、豊臣秀吉が奈良の東大寺にならって大仏を安置した。開山は大徳寺の古溪宗陳である。大仏は六丈の像高で、仏殿は重層瓦葺きで二十丈の高さであったが、慶長元年（一五九六）の大地震により破壊した。そのため秀吉は信州善光寺本尊を請じて安置したところ異変があつて善光寺へもどした。後に豊臣秀頼は亡父追善供養のため同七年（一六〇二）、再建に着手したが年末の失火で頓挫し、あらためて同十五年（一六一〇）、着工し、二年後の同十七年に完成した。仏殿は棟高十七丈三尺、桁行三十丈七尺、梁十九丈二尺の規模で、大仏は金銅像で六丈三尺の像高であった。そして南北百二十間、東西百間の廻廊をめぐるした。同十九年（一六一四）には高さ一丈八寸、口径九尺一寸五分の巨鐘を鑄造したが、鐘銘をめぐる徳川家康と不和を生じ、大坂冬の陣の原因の一つとなった。寛文二年（一六六二）、震災で破壊した大仏を銭貨とし、寛政十年（一七九八）、造り直された木仏は雷火で焼失、天保年中（一八三〇〜四四）に尾張国から半身木仏を移座した。
- (5) 建仁寺は、京都市東山区大和大路通四条下ルにある臨濟宗建仁寺派の大本山で、建仁二年（一一〇二）の創建である。山号を東山という。開山は明庵栄西、開基は鎌倉將軍の源頼家で、京都五山の一つである。建造物として重要文化財の勅使門（矢ノ根門）、方丈があり、絵画には国宝の俵屋宗達筆の風神雷神図屏風 二曲一双、重要文化財の海北友松筆の竹林七賢図 十六幅、同・雲竜図 八幅など多数を蔵している。
- (6) 鴨川は、丹波高原の棧敷ヶ岳付近を水源とし、京都盆地を、南流し、南部で桂川に流入する。一般に京都市内東部で高野川と交わる上流を賀茂川、下流を鴨川という字を用いている。
- (7) 五条橋は、京都市下京区と東山区の鴨川五条に架かる橋である。平安時代の初期には架けられたという。洛中から清水寺へ参詣するうえで重要な橋であり、清水寺本坊成就院が修理・管理を行い、勸進僧たちが寺の監督のもと中世以来人々から通行料を徴収した。近世に入って、豊臣秀吉が方広寺大仏殿を造営するにあたり、五条橋を現在の位置に移築した。新しく架けられた橋の路は六条坊門小路であったが、後に五条通と称するようになり、旧の五条通は松原通と称するようになった。
- (8) 四条橋は、鴨川四条に架けられた橋で、京中から祇園社（八坂神社）への参詣道にもあたつており、橋の両側が四条河原と呼ばれ、中世には猿楽や田楽の勸進興行が行われた。後に歌舞伎の祖といわれる出雲阿国が舞台をたて興行を行ったという。芝居小屋ははじめ西岸にあつたが、鴨

川堤の修築にともない東岸に移動した。

洛中洛外図屏風では一般に小さくて簡素に描くが、本図では勘違いであらうか、三条橋を思わせる欄干のある立派な橋となっている。

- (9) 鹿苑寺(金閣寺)は、京都市北区金閣寺町にあり、臨済宗相国寺派に属する。通称を金閣寺という。山号は北山。開山は夢窓疎石、開基は足利義満で、義満の北山殿の舍利殿をもって禅寺とする。歴代の足利将軍は護寺に尽力したが、応仁の乱で金閣は焼失を免れたが多くの堂宇を失った。その後、諸堂が再建された。庭園は池泉回遊式で特別史跡・特別名勝指定。昭和二十五年に金閣を焼失したが、同三十年に復元・再建された。重要文化財に伊藤若冲筆の大書院障壁画(五十面)などがある。

- (10) 大堰川は、京都市西部を南流する川で大井川とも書く。京都府船井郡の丹波山地に源をもち、亀岡市にいたり、嵐山を通って淀川に注ぐ、嵐山から松尾あたりまでを大堰川と称する。その上流は保津川といい、下流は桂川という。

- (11) 松尾大社は、京都市西京区嵐山宮町にあり、四条通西端に位置し、東端の八坂神社(祇園社)に対峙して鎮座する。大宝元年(七〇一)、勅命により秦忌寸都理が社殿を創建し、松尾山の磐座から神霊を勧請したという。西の玉城鎮護社に位置付けられ、また、中世以降、酒の神様として信仰を集める。

- (12) 二条城は、京都市中京区二条城町にある城郭で、慶長八年(一六〇三)三月に竣工した。元和六年(一六二〇)の徳川和子の入内がこの城から執行され、また、寛永三年(一六二六)の後水尾天皇の「行幸」に際し、同年より大規模な修築工事が行われ、城域の西方への拡張があつて、本丸・天守の移動再建、行幸御殿の新造が行われた。その後、暴風雨や地震・雷雨などで破損が重なり、寛延三年(一七五〇)には五層の天守が落雷によって焼け落ち、以後、再建されることはなかった。天明八年

(一七八八)の大火で類焼し、本丸御殿や二隅櫓・二門が焼失した。慶応二年(一八六六)、徳川慶喜が二条城で将軍宣下をうけたが、翌年十月、大政奉還の上表を行い将軍職を辞し、十二月には二条城を退去した。

- (13) 後水尾天皇は、慶長元年(一五九六)、後陽成天皇の第三皇子として生まれる。同十六年(一六一二)三月、踐祚し、四月に即位礼を挙げた。元和六年(一六二〇)六月、将軍徳川秀忠の娘和子を女御とした。在位は十九年間で、寛永六年(一六二九)に譲位し、延宝八年(一六八〇)八月十九日、八十五歳で崩御された。文芸を好み、和歌をはじめ連歌や漢詩・書道などのほか、茶道・華道・香道、あるいは絵画なども嗜んだ。
- (14) 堀川は、賀茂川を水源とし平安京を南北に流れる運河で、現在は水源が断たれて流水がなく、御池通以南は暗渠化されている。
- (15) 岩佐又兵衛は、天正六年(一五七八)、摂津国伊丹城主荒木村重の子として生まれる。名は勝以、通称を又兵衛といい、岩佐は母方の姓である。寛永年中(一六二四〜四四)に越前国北之庄(福井)に移住したが、同十四年のころ江戸に移り、慶安三年(一六五〇)六月二十二日、七十三歳で没した。土佐派の大和絵系の手法を修め、和漢の故事や古典文学に取材し、独特の画風を開拓した。

- (16) 祇園祭は、祇園社(八坂神社)の祭礼である。祇園会、祇園御霊会ともいい、平安時代、全国に流行った疫病が牛頭天王の祟りであるとし、勅を奉じて六十六本の矛を立てて祭り、その消除を祈ったのに由来するといふ。明治維新以後、暦法の改正により、祭日が七月十七日(前祭)と二十四日(後祭)となり、山鉦が巡行する。

- (17) 狩野探幽は、慶長七年(一六〇二)、狩野孝信の長男として京都に生まれる。同十七年(一六一二)、駿府で徳川家康に謁し、江戸に赴く。元和三年(一六一七)、幕府御用絵師となり、同七年(一六二二)には鍛冶橋門外に屋敷地を受領した。同五年(一六一九)の東福門院入内に係

- り御所拡張工事が行われた際の障壁画制作に参加し、同九年(一六二二)に改築の大坂城に描き、また以後、江戸城改築(こと)に障壁画を制作した。寛永三年(一六二六)、二条城行幸殿、同十一年(一六三四)、増築の名古屋城上洛殿、同十三年(一六三六)に完成の日光東照宮、同十四年に芝増上寺安国殿、同十八年(一六四一)に大徳寺本坊方丈、同十九年に寛永度造宮の御所、聖衆来迎寺、続いて承応・寛文度造宮の御所と非常に多くの障壁画を描いた。この間、寛永十五年(一六三八)に法眼に叙せられ、寛文二年(一六六二)には法印まで昇ったが、延宝二年(一六七四)十月七日、七十三歳で没した。淡白瀟洒な画風を開拓し、江戸狩野派の基礎を築き、江戸時代の絵画に大きな影響を与えた。
- (18) 前田宗辰は、加賀藩第七代藩主である。父は六代藩主前田吉徳、母は浄珠院で享保十年(一七二五)に金沢で生まれる。延享二年(一七四五)に家督を相続したが、同三年十二月八日、二十二歳で江戸に没した。法号を大応院梅関雪峰大居士という。
- (19) 常姫は、会津侯松平正容の娘で、享保十年(一七二五)に生まれる。延享元年(一七四四)四月に入興したが、同二年十二月晦日、二十一歳で没する。
- (20) 『貞享二年寺社由緒書上』。
- (21) 日立上人は、正長二年(一四二九)八月十五日、示寂する。
- (22) 長谷川等伯ふるさと調査。
- (23) 北國新聞 夕刊 平成九年(一九九七)三月二十五日発行。
- (24) 「順勝手」とは逆の左上から右下へと引かれるものを「逆勝手」という。研究者によっては逆の捉え方をする人もいる。片岡肇氏は、『京都文化博物館研究紀要 朱雀』第九集において、洛中洛外図屏風の町筋の勝手による分類を試み、「第一類 左右隻とも逆勝手のもの、第二類 左右隻とも順勝手のもの、第三類 左隻が逆勝手で、右隻が順勝手のもの、
- 第四類 左隻が順勝手で、右隻が逆勝手のもの、第五類 左右隻とも順勝手・逆勝手相半ばするもの」の五種の類型に分類された。
- (25) 「上杉家本」は、米沢市上杉博物館所蔵。国宝。織田信長から上杉謙信に贈られたものとの伝えがあり、狩野永徳筆とされる。二四八五人の様々な階級の人物を登場させている。
- (26) 「歴博乙本」(旧高橋家本)は、国立歴史民俗博物館所蔵。重要文化財。旧の所蔵者から高橋家本とも呼ばれ、景観年代、及び制作年代は桃山時代の一五八〇年代とされている。一六一八人の人物を描き込んでいる。筆者は狩野永徳の父・狩野松栄、あるいはその周辺の絵師と考えられていたが、近年、永徳の弟・狩野宗秀またはその周辺の絵師との説が提出されている。
- (27) 教王護国寺(東寺)は、京都市南区九条町にある。延暦十三年(七九四)の平安遷都の直後、羅城門の左に東寺、右に西寺が創立された。教王護国寺はこの東寺である。堂宇はその後幾多の変遷があったが位置は現在も変わっていない。
- (28) 大神人とは、中世から近世にかけて、神社に從属し、下級の諸役を奉仕する者を神人というが、とくに京都の祇園社の神人で祇園祭の神幸の警護や道路の清掃に從つたりした人たちをいい、「つるめそ」とも呼ばれた。
- (29) 禁裏は、天皇の住居としての御殿。御所、内裏、皇居ともいう。京都市上京区にあり、後小松天皇から明治天皇の東京奠都(明治二年)まで皇居であったところ。現在の建物は、寛政二年(一七九〇)に造営されたが、炎上し、安政二年(一八五五)に再建された。築地の東面に建春、西に宣秋、南に建礼、北に朔平の四門があり、紫宸殿や清涼殿など古式のまま現存する。
- (30) 鞍馬山は、京都市北部にある山で海拔五七〇メートル。山中に鞍馬寺が

ある。俗に鞍馬天狗が住むといい、源義経が武芸を練習した所という。古来、京都の北方鎮護と福徳の寺として信仰を集める。

(31) 今宮神社は、京都市北区紫野今宮町に鎮座し、大國主命・事代主命・稲田姫命の三柱を祭神とする。社伝によれば、平安時代の正暦五年(九九四)に疫病が流行したので朝廷は神輿を造らしめ、船岡山に安置し御霊会を修したのに始まるという。その後、疫神を紫野に祭り病害を防ごうとした。東山の祇園社が疫神であるため、それに対して祇園の今宮の意をとって今宮と称した。

(32) 北野天満宮は、京都市上京区馬喰町に鎮座する。主祭神は菅原道真で、平安時代の十世紀半ば天曆元年(九四七)の創建という。寛弘元年(一〇〇四)の一條天皇の行幸をはじめ、代々皇室の崇敬をうけ八棟造の社殿は慶長年中、豊臣秀頼の造営である。「学問の神」としても知られ、また、例祭は八月四日である。

※(1)〜(17)、(27)、(29)〜(32)、については、『國史大辞典』(吉川弘文館刊)、『広辞苑』(岩波書店刊)などから引用・記述した。

《参考文献》

内藤 昌 近世洛中洛外図屏風の景観類型

―新出図の考察を契機として 國華 九五九号 昭和四十八年(一九七三)
辻 惟雄 洛中洛外図 日本の美術 第二二二号 至文堂 昭和五十一年(一九七六)

武田恒夫ほか 風俗画―洛中洛外

日本屏風絵集成 第十一巻 講談社 昭和五十三年(一九七八)

大塚活美 洛中洛外図にみる京郊村落

地方史研究 三十八―一 通巻二二一 昭和六十三年(一九八八)

京都国立博物館編 洛中洛外図

都の形象―洛中洛外の世界 淡交社 平成九年(一九九七)

片岡 肇 洛中洛外図屏風の類型について(一)

京都文化博物館研究紀要 朱雀 第九集 平成九年(一九九七)

所 広秋 光明寺所蔵「洛中洛外図屏風」について

岐阜市歴史博物館研究紀要 第十二号 平成十年(一九九八)

黒田日出男 絵画史料で歴史を読む 筑摩書房 平成十六年(二〇〇四)

小島道裕 洛中洛外図屏風歴博甲本の成立と初期洛中洛外図屏風諸本

国立歴史民俗博物館研究報告 第一四五集 平成二十年(二〇〇八)

吉川弘文館編集部 京都古社寺辞典

吉川弘文館 平成二十二年(二〇一〇)

岐阜市歴史博物館 洛中洛外図に描かれた世界 平成二十二年(二〇一〇)

小島道裕ほか 洛中洛外図屏風歴博甲本の総合的研究

国立歴史民俗博物館研究報告 第一八〇集 平成二十六年(二〇一四)

知念 理 大阪市立美術館蔵「洛中洛外図屏風」(田万家旧蔵本)の研究

大阪市立美術館紀要 第十四号 平成二十六年(二〇一四)

知念 理 大阪市立美術館蔵「洛中洛外図屏風」(田万家旧蔵本)の研究

補論(一) 大阪市立美術館紀要 第十六号 平成二十八年(二〇一六)

京都文化博物館 洛中洛外図屏風 京を描く 平成二十七年(二〇一五)

西山 剛・森 道彦 近世における洛中洛外図制作の様相 ―「洛中洛外図屏風(松居本)」の紹介をかねて― 京都文化博物館研究紀要

朱雀 第二十七集 平成二十七年(二〇一五)